大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

東アフリカにおけるローカルなFGM/C廃絶運動について：ケニア西部のマサイの事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 愛美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017703

2021年度 男女共同参画事業

東アフリカにおけるローカルなFGM/C[1]廃絶運動について：ケニア西部のマサイの事例から[2]

林　愛美

はじめに

大阪府立大学人間社会システム科学研究科で客員研究員をしております林愛美と申します。本日は、東アフリカ・ケニア共和国（Republic of Kenya）に暮らす牧畜民マサイ（Maasai）の社会におけるFGM/C（Female Genital Mutilation/Cutting: FGM/C）にかんする研究の成果をご報告致します。

マサイはケニア西部からタンザニア北部にかけての広範な半乾燥地域に暮らしており、通過儀礼としてFGM/Cを行ってきました。しかしながら、この慣習は女性の心身に深刻な影響を与えるため、1970年代から国際社会で廃絶運動が提起され、ケニア政府も規制を行ってきました。中でもケニア西部のマサイ地域では、1990年代から国内NGOによるFGM/Cの廃絶運動が行われてきました。しかしながら、ケニアのローカルなFGM/C廃絶運動についての数少ない研究（Mohamud et al. 2006）は活動報告に留まっており、同地域の実態については国際機関の報告書（Equality Now 2011; Matanda et al. 2018）に頼らざるを得ない状況です。そのため本発表では、マサイの人びとによるローカルなFGM/C廃絶運動と地元の人びとの反応について、フィールドワークのデータを基にその詳細を報告します。

---

[1] 女性器切除・「女子割礼」には多様な用語があり、論者の立場に応じて選択されてきました。本発表では1999年にUNICEFとUNFPAが提案した施術の危険性と同時に慣習を行う社会への敬意を表現するハイブリットな用語であるFemale Genital Mutilation/Cuttingの略称、FGM/Cを使用します（UNICEF 2013: 7）。なお、インタビュー協力者がFGM/Cを「女子割礼」と表現したケースについては、「割礼」と表記しています。

[2] 本稿は、林（2021）を基に大阪府立大学女性学研究センター主催2021年度男女共同参画事業にて報告した発表の記録です。

本日は、まずローカルな廃絶運動の重要性について確認した後、マサイの社会で通過儀礼として行われてきたFGM/Cの内容とその変化について提示します。そして、ローカルな団体は儀礼としてのFGM/Cにどのように介入しているのかについてその実態と地元住民の反応について報告し、ローカルな組織がFGM/C廃絶運動において果たす役割について考察します。

1．FGM/C廃絶におけるローカルな組織と住民参加の重要性

女性の権利を擁護しようとする国際的な流れを受け、1970年代から国際社会では活発なFGM/C廃絶の議論と運動が始まりました。しかしながら、こうしたキャンペーンは西洋中心的で植民地主義的であるという批判や数十年間の運動の経験を経て、国際機関や活動家の間では次のことが認識されるようになります。まず、イギリスに拠点を置くアフリカ系研究活動家のEfua Dorkenooは、この慣習と闘っているアフリカの女性を支援する唯一の方法は、当該社会の人びとと共に特別なプロジェクトや教育活動を計画し、実行することであると述べています（Dorkenoo 1995: 63）。また、大学教授でスーダン政府の反FGM委員会のメンバーでもあるNafisa Bedriは、20～30年間のFGM/C廃絶運動の経験を経て、コミュニティの男女双方を対象とした持続的な介入が必要であると指摘し、FGM/C廃絶を成功させるには、NGOが重要なアクターであると述べています（Bedri 2007: 1）。同様にWHOも、この数十年間でNGOはFGM/C廃絶において中心的な役割を果たしており、政府と開発援助機関から強い支援を受けた地域密着型の活動が最も効果的であったと指摘しました（WHO 2008: 19）。このように、現在のFGM/C廃絶運動では地域に密着した組織のイニシアティブと住民の参加が重要な点として認識されているといえます。したがってここでは、ケニアのマサイの地域において国際機関から支援を受けたローカルなFGM/C廃絶運動について、マサイの市民社会組織（community-based organization: CBO）に着目し、その役割と課題を分析していきます。

２．ケニア政府のFGM/C廃絶政策とマサイ社会におけるFGM/Cの実施状況

ケニア政府は国際的なFGM/C廃絶の流れを受けて2001年に18歳未満のFGM/Cを禁じ、初めて禁固刑と罰金を設けました（The National Council for Law Reporting. 2012a）。FGM/Cのゼロ・トレランス[3]（全面禁止）が国際的な了解になると、2011年にはFGM禁止法（Prohibition of Female Genital Mutilation Act）が成立しました。これは全ての女性へのFGM/Cを禁じるものであり、３年以上の禁固もしくは20万ケニア・シリング[4]以上の罰金またはその両方という厳罰を伴うものです（The National Council for Law Reporting. 2012b）。また、この法律に伴って政府機関に反FGM委員会（Anti-FGM Board）が設置され、廃絶運動に長く関わってきた活動家たちがリクルートされました。反FGM委員会はケニア国内のFGM/Cについての基礎調査を行い、それらに基づいて政府に政策提言を行うとともに、非政府組織に向けた廃絶運動マニュアルなどを発表してきました（Anti-FGM Boardウェブサイト）。マサイ地域での運動もこの委員会の活動と緩やかに関連しています。

ケニア国内には約40の民族社会があると言われており、そのうちFGM/Cは約15の社会で行われています（UNICEF 2020: 2-6）。マサイの実施率は増減があるものの、2014年の統計データでは77.9％とケニアの全国平均21.0％に比べて非常に高くなっています（NCPD 2015）。ケニア国内においてマサイは４番目に実施率の高い集団です。

３．マサイの通過儀礼におけるFGM/C

3.1．調査地概要

私はこれまで、ケニア西部のナロク・カウンティ（Narok County）で行政

---

[3] 2003年にエチオピアのアジスアベバで開かれた国際会議において毎年２月６日を「世界FGM根絶の日」とすることが宣言されました。以降、軽微な施術やFGM/Cの医療化を含めた一切の施術を認めない「FGMのゼロ・トレランス」が国際的なコンセンサスとなりました（Shell-Duncan 2008）。

[4] 20万ケニア・シリングは日本円で約20万１千円（2021年12月17日時点）です。

機能が集中しているナロク北部（Narok North）において、成人人口約2000名、145世帯ほどで構成される村（以下、調査村）で調査を行ってきました。

マサイは牧畜を中心的な生業としてきましたが、調査村では政府の定住化政策の影響によって土地が個人所有となり、生業は半農半牧に移行しています。人びとは牛や小家畜のミルク、野菜に頼る生活をしています。また、出稼ぎ労働に従事する人もいれば土地をプランテーション業者に貸し出し、賃料を得ている人もいます。それによって現金経済が浸透していることが村の特徴であり、中村香子さんが調査されたケニア北中部に暮らす牧畜民サンブル（Samburu）の地域（中村 2021）とは大きく異なっています。

調査村にはプロテスタント系の教会が８つあり、隣村にはカトリック教会もあります。他にもコミュニティ・クリニックと公立小学校が一つずつあります。電気、ガス、水道はないものの、共同の井戸が一つあるため、女性たちがポリタンクをロバに運ばせて水汲みをして生活用水を調達しています。

3.2. 年齢体系とFGM/C

FGM/Cは年齢体系と呼ばれるマサイのライフコースと関係しています。マサイはサンブルと同じ言語系統の民族であり、サンブルと似た年齢体系システムを持っています。1980～90年代の民族誌で提示されたモデルは現在とは少し異なるものの、FGM/Cと年齢体系について理解するうえで参考になるため、以下に引用します。

Spencer（1993）によると、男性は生まれてから割礼を受けるまでを「少年」として過ごします。割礼は男子のものも女子のものもマサイ語でエムラタ（*emurata*）と呼ばれます。その後、男性は４～15年程度を未婚の青年として過ごし、結婚を経て長老となります。

一方女性の場合、結婚するまでを「少女」として過ごし、エムラタ（割礼）を受けて直ちに結婚して「成人女性」となります。この女子のエムラタがFGM/Cに当たります。ただし10代前半での結婚は近年では早期婚や児童婚であるとして支持しないマサイの人も増えており、調査村では20歳前後に結婚するのが一般的になっています。こうして子ども時代を終え、大人になるための通過儀礼の中で行われるのが男性割礼であり、FGM/Cです。

3.3. 女性の通過儀礼とFGM/C

マサイのFGM/Cは女性の通過儀礼（以下、成女儀礼）の中で行われます。ここでは、1980～90年代の民族誌（Talle 1988; Mitzlaff 1988=1994）で提示された儀礼の記述に私の調査結果を交えながら儀礼のプロセスを提示します。

女性は第二次性徴期を迎えるとFGM/Cを受けます。成女儀礼はいくつかの儀式とFGM/C、そして隔離期間によって構成されます。隔離期間中、少女は自宅に留まるものの、儀礼中であることを示す衣装と装身具を身に着け、成人女性と行動を共にし、未婚の男性とは接触しない等の行動規範を守って過ごします。隔離期間に身に着ける衣装には、神聖な色とされる黒や紫などの暗い色彩の布が好まれます。装身具は、地域で閉経を迎えた女性たちがビーズや貝殻を用いて作ったものが少女に贈られます。

FGM/Cの施術を担うのは、エンカムラタニ（*enkamuratani*）と呼ばれるマサイの熟練した女性施術師です。施術では、クリトリスと小陰唇の切除が行われます。マサイの社会では、FGM/Cによって子ども時代の汚れを取り除くことで大人の体になれると考えられています。FGM/Cをしていない女性が産んだ子どもは不吉とされ、妊娠が発覚したら直ちに切除が行われます。FGM/Cでは、性器に加工を施すことで子ども時代を卒業し、出産が社会的に認められる身体になることが目指されます。FGM/Cは「新たな成人の誕生（Talle 1988）」を意味するため、施術が終わると盛大な祝宴が行われます。その後4か月程度、少女は子どもと大人の中間の地位であるエンカイバルタニ（*enkaibartani*）となり、行動規範や食事にかんする決まりを守りながら母親の自宅で隔離期間を過ごします。そして結婚式の前日に儀礼は終了してきました。ただし、近年では早期婚への反対や学校教育などの影響により、FGM/Cを受けても直ちには結婚せず、自宅で過ごしたり学校へ通ったりして過ごす女性が多いようです。

マサイの女性の社会的地位に目を向けると、低く留まっていると言わざるを得ません。マサイの女性は慣習的に父親の財産を相続することができず、結婚の際は親が決めた相手のところに家畜や現金と交換に嫁がされます。そのため、女性は結婚して夫側親族の財産に依存しなければ生きていけない状況に置かれています。このように、女性の置かれている社会的地位およびFGM/Cと出産にまつわる規範の両方がFGM/Cの実践を支えていると考えられます。

3.4. 変容するFGM/Cの実践

以上のように、慣習として通過儀礼の中で行われてきたFGM/Cですが、その内容は時代によって変化してきました。表1[5]には、調査村で24名のマサイの女性にFGM/Cについての聞き取り調査を行った結果を示しました。調査は2013年８月19日～2015年７月31日にかけて断続的に行いました。調査協力者の女性たちがFGM/Cを経験した年代は1959～2009年頃でした。

表１　24名の女性たちが経験したFGM/Cの内容

（単位：人、カッコ内は就学者数）

		世代 1（N=7, うち就学者 1）	世代 2（N=4, うち就学者 1）	世代 3（N=6, うち就学者 3）	世代 4（N=7, うち就学者 5）
施術の時期		1959-1979年	1980-1989年	1990-1999年	2000-2009年
施術のタイプ	タイプ１		2（1）	2（1）	6（4）
	タイプ２	7（1）	2	4（2）	1（1）
施術道具	手作りのナイフ	5			
	工業製の剃刀	1	4（1）	4（2）	3（2）
	医療用ナイフ			2（1）	4（3）
	不明	1（1）			
施術者	施術師（エンカムラタニ）	7（1）	4（1）	4（2）	7（5）
	医師			2（1）	
麻酔の使用	あり			1（1）	3（1）
FGM/Cの後	結婚	7（1）	3	1	
	未婚のまま		1（1）	5（3）	7（5）

表１を見ると、まず施術のタイプが変化していることがわかります。1959～1979年にFGM/Cを経験した世代１では、全員がタイプ２に当たるクリトリスと小陰唇の切除を受けていますが、世代２と３ではクリトリスのみの切除を受けている人が現れています。2000年以降にFGM/Cを経験した世代４では７名中６名がタイプ１を受け、タイプ２の施術を受けたのは一人だけでした。このことから、FGM/Cの内容は軽度化しているといえます。

[5] 表１およびその分析については林（2021）で詳述しているためそちらもご参照下さい。

また、施術道具も年代によって異なっています。かつては金属を研磨した手作りのナイフが使いまわしされていましたが、その後工業製品のナイフの使い捨てに移行し、近年では薬局で購入できる医療用ナイフが使用されるようになりました。

こうしてFGM/Cが変化した背景については、現金経済化や近代医療との関係が考えられます。例えば、エンカムラタニ（施術師）は、薬局で医療用のナイフや消毒液を購入してFGM/Cの際に使用したと証言しています。ただし、FGM禁止法以降は、実践が地下化しています。聞き取り調査では、儀礼的慣行や祝宴を省略して隠れてFGM/Cを行ったり、施術師を呼ばずに訓練を受けていない家族の女性が施術したりという危険な状況も確認されました。

4．ローカルなFGM/C廃絶運動

4.1．ナロク・カウンティ都市部におけるFGM/C廃絶運動

ナロク・カウンティで行政機関が集まる都市部では、国内外のNGOやCBO、教会といった様々なアクターが、FGM/Cの廃絶運動を行っています。活動内容は組織ごとに異なりますが、具体的には、FGM/Cから逃れた少女の保護やコミュニティに対する啓発活動、そして代替の通過儀礼（以下、代替儀礼）などです。

4.2．マサイの市民社会組織 Osotua

中でも私は、マサイの女性が立ち上げたCBOであるOsotua（仮名）[6]に注目して調査を行ってきました。本報告では、2013年１月～2019年９月にわたって断続的に行った調査結果を基にOsotuaの活動について紹介します。

Osotuaは自身もFGM/Cを経験したマサイの女性が、早期婚やFGM/C廃絶のため1999年に立ち上げました。Osotuaは地域に密着したローカル団体ですが、国連人口基金や国際NGOが主に経済的に支援しており、資金力を有しています。また、ケニア政府がFGM/Cを法的に規制し始めて以降は、地方政府

---

[6] ここではCBOが保護した少女たちのプライバシー保護のため、マサイ語で平和や友好を表すOsotuaという言葉を仮名として用いています。

や警察、地域の指導者とも連携して活動しており、影響力を持っています。

Osotuaはマサイの文化への知識を背景に独自の活動を行ってきました。年間を通じた中心的な活動は、FGM/Cや早期婚を強制された少女をレスキューセンターと呼ばれる施設で保護するものです。Osotuaは少女を保護すると、地域住民と交渉を行います。そして、行政と連携して少女にFGM/Cを行わないことや早期婚をさせないことを保護者に約束させます。その他にも、定期的に老若男女に対して教会や学校などの場所を借りてFGM/Cの弊害や少女の権利をめぐる啓発活動を行っています。また、FGM禁止法により収入源を失った施術師に対し換金作物によって自活できるよう職業訓練も行っています。最後に、代替儀礼を年に１～２回行っています。代替儀礼とは、FGM/Cを行わずに少女を成人させるため新しい儀礼を提案するものです。

4.3. レスキューセンターの役割

Osotuaは様々な活動を行っていますが、中でもレスキューセンターの役割は大きいと考えられます。レスキューセンターでは、FGM/Cから逃れた少女を様々な経緯で保護しています。保護された少女たちは、就学支援を受けてレスキューセンターから学校へ通うことになっています。Osotuaは、少女に中等教育を受けさせてから地元へ帰すことを理想としており、少女の授業料、制服代、教科書代、文具代などを支援しています。また、2013年の調査時、レスキューセンターがあるOsotua本部に常駐するスタッフは１名を除く全員が女性でした。代表はマサイの女性、プログラム・オフィサーは農耕民カレンジン（Karenjin）の女性、会計係は農耕民キクユ（Kikuyu）の女性でした。事務スタッフはマサイの女性で、レスキューセンターの女子寮で世話係をするのもマサイの女性でした。唯一警備員だけはマサイの年配の男性が務めていました。

少女たちは様々な経緯でレスキューセンターへやってきます。私が2013年８月にレスキューセンターを訪問した際には、約40名の少女たちが保護されており、寮で生活していました。そのうち協力を得られた６名の少女たちに聞き取り調査を行い、うち３名よりFGM/Cから逃れた経緯を聞き取ることができました。３名の少女がOsotuaに保護された経緯を見ると、２名はFGM/Cを強制されそうになったところを家出し、キリスト教会を通じてレスキューセンターに送り届けられた、もしくは自分でたどり着いたと述べました。残る１名は儀

礼が始まってからFGM/Cの直前に家出し、村人に教えられてセンターにたどり着いたそうです。彼女たちの発言からは、Osotuaのレスキューセンターの存在がナロクの住民に広く知られていること、またナロク内で少女の保護ネットワークがある程度機能していることがうかがえます。

4.4. 代替通過儀礼と成女儀礼

次に、Osotuaの特徴的な活動の一つであり、国際機関からも注目を集める代替儀礼について見ていきます。代替儀礼とは、切除をせずに成人するため代替の儀礼を提案するプログラムで、FGM/C廃絶手法の一つです。1996年にケニアで初めての代替儀礼が実施されて以降、ケニア国内では国際NGOのWorld Visionなどいくつかの団体が実施しており、政府機関の反FGM委員会も実施を推奨しています。Osotuaの代替儀礼は４日間の教育期間と５日目の修了式で構成されます。私は2015年８月に実施された代替儀礼修了式の調査を行いました。

2015年８月の代替儀礼は、15歳までのマサイの少女約100名がナロクの各地から集められ、ナロク都市部に近い私立の初等学校（以下、私立小学校）にて実施されました。５日目の修了式には少女の保護者や近隣住民、活動家、地方政府の役人や牧師をはじめとする成人男性約100名、女性約200名がゲストとして会場に招かれ、キリスト教式のお祈りをもって切除の代わりとする儀式が行われました。そして少女に修了証書とレスキューセンターへのホットライン番号、マサイ語で「少女に教育を」というスローガンが書かれたTシャツが贈られてプログラムは終了となりました。

2015年の代替儀礼では、「FGM/CにNoといえるようになること」が目標として掲げられ、４日間の教育期間においてOsotuaのスタッフと会場となった私立小学校の教員がリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖にかんする健康と権利）学習を中心とした４日間の啓発セミナーを行いました。セミナーのテーマには、少女たちが自分たち自身について知り、気づくこと、また子どもの権利や通過儀礼について理解を深め、人生の課題に対処する方法やHIV/AIDSについて知り、他人を尊敬する方法や将来良い妻になる方法について学ぶことなどが掲げられていました（林 2020）。

Osotuaの代替儀礼は以上のような教育内容と修了式で構成されます。

Osotuaのスタッフは代替儀礼のプロセスについて、マサイの成女儀礼を模して構築されていると説明していました。しかしながら、代替儀礼の内容をマサイの成女儀礼と比較すると、この２つは大きく異なっていることがわかります。まず、マサイの通過儀礼において少女はFGM/Cを受けますが、Osotuaの代替儀礼では当然受けません。次に、会場については、成女儀礼が自宅や親戚の家など生まれ故郷で行われるのに対し、代替儀礼は故郷から離れた都市部に近い小学校などの施設で行われます。また、隔離期間では母親の下で行動規範や服装、食事にかんする決まりを守りながら個別に日常生活を送るのに対し、代替儀礼では小学校の寮にて少女たちで集団生活を送ります。成女儀礼は数か月間かけて行われますが、代替儀礼は５日間で完了します。また、成女儀礼の教義では生活の中で母として妻として必要なことを学びとることを求められるのに対し、代替儀礼ではリプロダクティブ・ヘルス/ライツという新しい性と生殖における概念を用いた教育が学校の教室にて行われます[7]。

成女儀礼では地域の成人女性と生活を共にする中で教義を身に着けることが目指されるのに対し、代替儀礼では講師から授業形式で教育を受けます。衣装については、成女儀礼では儀礼用の特別な衣装と地域の女性たちが手作りした装身具を身に着けるのに対し、代替儀礼は私服で行われます。修了式のみ少女たちはOsotuaから送られたTシャツ（マサイ語で『少女に教育を』のプリント）を身に着けていました。

以上の観察結果をまとめますと、代替儀礼は儀礼用の衣装や装身具などは用いられず、文化的要素に乏しいと言わざるを得ません。教育期間には講師が小学校の教室にて少女たちにリプロダクティブ・ヘルス/ライツ教育を行うため、儀礼というよりは学校教育を連想させるものとなっています。また、従来の儀礼で重要な役割を果たしてきた施術師や両親、地域住民は修了式にゲストとして招かれるのみであるため、家族や地域社会との結びつきは弱くなっています。したがって、このイベントはマサイの人びとにとって「儀礼」には感じられないのではないかと考えられます。

最後に、FGM/Cを受けていない女性が出産することが忌み嫌われているコ

---

[7] 成女儀礼と代替儀礼の比較についてはHayashi（2017）にて詳しく検討しているため、そちらもご参照下さい。

ミュニティで女性へのスティグマ（差別、偏見、排除）をいかにフォローするかが示されていない点が指摘できます。そのため、故郷に帰った少女たちが最終的にはFGM/Cを受けることが懸念されます。

5．ローカルなFGM/C廃絶運動と地元の人びと

5.1．代替儀礼参加者の意見

代替儀礼と成女儀礼の比較において明らかになった課題を考察するため、私が観察した2015年８月の代替儀礼に参加していた親子の意見を検討します。2015年の代替儀礼に参加していた少女アンと修了式に参加したその母親ジューンに対し、2016年１月19日に聞き取り調査を行いました[8]。

アン（12歳）の意見

彼女は６人きょうだいの第４子で次女です。姉は初等学校を中退した後、FGM/Cを受けて10代後半で結婚しました。しかしアンは初等学校に通っており、終了後は中等学校への進学を希望していました。2015年８月の代替儀礼には、母親の勧めで参加したそうです。

代替儀礼は国際NGOの支援で建てられた設備の整った私立小学校で開催され、アンは学校をとても気に入ったと述べました。彼女はワークショップの内容をノートに記録して村の自宅へ持ち帰り、大切に保管しています。彼女は代替儀礼に参加した村の友人たちとFGM/Cについて話した上で実践に反対しています。また、何かあったら通報できるようOsotuaのホットライン番号を暗記しているそうです。アンは両親にもFGM/Cを受けないと宣言しており、近隣住民もそのことを知っています。

アンの母親ジューン（37歳）の意見

ジューンは2015年の代替儀礼の修了式に私と一緒に参加していました。ジューンに教育歴はないものの熱心なキリスト教徒であり、家畜のミルクを売る小規模ビジネスを行っています。彼女は、自身が経験した過酷なFGM/Cや

---

[8] 親子の名前は仮名です。また、年齢は全て調査当時のものです。

早期婚、経済的な苦労を娘にはさせたくないと考えており、女子教育を推進するOsotuaに賛同しています。そのため、2015年に代替儀礼の案内があった際、娘に参加を勧めたそうです。ジューンは、娘のアンはOsotuaの電話番号を知っているためFGM/Cを強制したら通報するだろうと考えています。したがって娘にはFGM/Cを強制しないつもりであり、夫もそのことに同意しているそうです。彼女は、息子たちには父親の財産（土地や家畜）が残るが、娘たちには何もない（ので教育を受けさせたい）と考えています。

5.2. 代替儀礼から４年後

2016年の調査時、アンとその母親ジューンはCBOの活動と代替儀礼に積極的に参加しており、廃絶運動によい印象を持っているようでした。それから４年後の2020年１月に私はフィールドでジューンに再会しました。その際、娘アンの近況を訪ねたところ、なんと彼女は娘を代替儀礼が行われた私立小学校に転校させたと述べました。

会場となった小学校は国際NGOの支援で建てられ、遠隔地の学校に比べると設備面で非常に充実しています。一方調査村の学校は、学習机や椅子などの設備が不十分であり、教員も不足しているという問題を慢性的に抱えており、教育熱心な保護者は子どもにより良い教育を受けさせる機会に敏感です。したがって、進学を見据えて子どもを教育レベルの高い学校に編入させる事例は時々見られます。

ジューンの娘アンは中等学校への進学を希望していたため、代替儀礼をきっかけにレベルの高い学校の存在を知った両親が彼女を編入させたものと考えられます。母親のジューンに娘のFGM/Cについて尋ねたところ、次のような回答が得られました。

> 「娘には今でも『割礼』をしていないし、本人はこれからも受ける気はないと言っている。だって娘はOsotuaの電話番号を知っているでしょう。娘に『割礼』を強制することはできないの。」

以上の回答を得た後、アンのFGM/Cについて裏付けの調査を行ったところ、長らく調査協力を得ているジューンの隣人女性から次のような証言が得られま

した。

「ジューンの娘アンは2018年12月に『割礼』を受けていた。弟と一緒に。弟が割礼された夜に施術師が密かに呼ばれ、アンは『割礼』されたみたい。ただし見学の女性たちは呼ばれなかったし、祝宴も行われていない。私も行っていないけど、隠したってわかるもの。祝宴は息子の割礼祝いの名目で共に行われたのだと思う。」

「今（2020年）は状況が厳しくなっている。アンの施術をした『割礼師』も最近は断っているみたい。（最近）『割礼』をするときに重要なのは、娘が了承しているかどうか。娘に『割礼』を強要して通報されれば親は困ったことになる。でもマサイの文化では『割礼』をしないことはものすごく悪いこと。だから、まだ隠れてやっている人たちがいる。」

アンが密かにFGM/Cを受けていたという隣人女性の証言は、FGM/Cの地下化の事例を示していると考えられます。この件についてはプライバシーや時間的制約の面でさらなる裏付け調査をすることが叶わなかったため、この話が真実であるかどうかは定かではありません。しかしながら、このような発言があった事実は看過できるものではありません。隣人女性からは2012年に行った最初のフィールドワークから調査協力を得ており、調査村滞在の度に彼女の自宅に寝泊まりさせてもらっています。したがって信頼関係が構築できていることから、隣人女性のこの発言はある程度信用できると考えられます。以上の要素を踏まえると、これはFGM/Cの実践が地下化している一つの事例であるといえます。

FGM/C地下化の背景には、禁止法が周知され、CBOが少女の保護体制を構築したことが考えられます。禁止法とローカルなFGM/C廃絶運動の浸透は、結果的に村落部におけるFGM/Cの監視を強めた側面があります。しかし同時に、娘にFGM/Cを強制したことが知れると親は逮捕されてしまうという状況が作り出されることによって、娘の意見を尊重しようとする家庭が現れているようです。さらに、ジューン親子が、FGM/C廃絶運動を教育の機会として捉えた点にも注目すべきでしょう。アンは代替儀礼に参加しながらもFGM/Cを受けたという点において、FGM/C廃絶は成功しなかったといえます。しかし

一方、代替儀礼はアンがよりレベルの高い教育を受けるきっかけを提供しており、その意味でローカルなFGM/C廃絶運動は予期せぬ影響を地域にもたらしたといえます。

おわりに

本発表では、Osotuaの活動の中でも代替儀礼プログラムおよびレスキューセンターでの少女の保護活動について詳しく取り上げました。

代替儀礼についてのOsotuaの説明――マサイの成女儀礼を参考に構築されたプログラムであり、かつFGM/Cを伴わない儀礼――は国際機関や政府の反FGM委員会が注目していることに鑑みても、廃絶論者には理想的に映るようです。しかしながら全体を通して考察したように、Osotuaのプログラムに限っていえば、イベント終了後にFGM/Cを受けている少女がいるなど課題もあります。その原因としては、プログラムが文化的要素に乏しく、教育期間における地域住民の参加が限られていることや、教育期間の訓練内容が西洋近代教育に近いものになっていることが挙げられます。これらの要因によって、代替儀礼はマサイの人びとからするととても儀礼としては感じられないことが考えられます。また、最大の課題は、FGM/Cを受けていない女性が出産することが忌み嫌われているコミュニティで女性へのスティグマをいかにフォローするかが示されていないことです。そのため、本日取り上げた地下化の例のように村に帰ると結局はFGM/Cを受ける少女が出てしまうことが問題といえます。

以上のように、代替儀礼の課題は多いもののOsotuaが果たしている役割は小さくありません。Osotuaのレスキューセンターでは、自身の信条と伝統的慣習とが相いれないという少女たちを受け入れるだけでなく、慣習的に教育を受ける機会が制限されてきたマサイの少女たちに継続した就学支援を行っているという点で、マサイ地域において重要な役割を果たしているといえます。また、アンとジューン親子の例を見ると、代替儀礼はFGM/C廃絶ではなく結果的に女子の教育機会の拡充に繋がっていました。また、地方のコミュニティに根をはるOsotuaの存在は、政府の禁止法とあわせて親への抑止力となっています。本報告では、これを少女の選択肢の拡大と解釈しました。

一方中村（2021）は、廃絶運動の浸透に伴う監視の強化はコミュニティを分

断させる可能性があるとして警鐘を鳴らしています。中村が調査するサンブル地域では、FGM/C廃絶に関わるNGOがローカル・チーフなどにコミュニティの監視を委託し、そのための通信料を現金で渡しています。ローカル・チーフはその金銭を使ってコミュニティの人間をスパイとして雇っているそうです。このような「工作」がコミュニティ間で成員の相互不信感を生んでいると中村は指摘しています（中村 2021: 115-116）。私の調査ではこのような事例は確認できませんでしたが、遠隔地のマサイ地域では現金経済があまり浸透しておらず、収入源に乏しいことから同様の事例が起こりかねないため、今後の調査では注意深く観察したいです。

また、FGM/Cの地下化について、本日は十分に論じられませんでした。宮地（2021）は、西ケニアのキシイ・カウンティ（Kisii County）において1990年代にはFGM/Cの施術を担ってきた医療従事者たちが、近年ではケニア政府のFGM/C規制を受けて施術を拒否するようになっていることを報告しています。また、中村（ibid.）はFGM禁止法による厳罰化に伴い、サンブル地域では治療であっても女性たちがFGM/Cに関連する診察を病院で受けることができないという問題を指摘しています。本発表では12歳の少女アンが密かにFGM/Cを受けたようであることを報告しました。また林（2021）の中で、施術師ではない家族の女性が自己流で自宅にて妹のFGM/Cを行った例を紹介しました。FGM/C廃絶運動の浸透に伴う実践の地下化は明らかに規制の弊害であると考えられるため、今後詳しく調査し、論じる必要があるでしょう。

最後に、Osotuaの活動にはマサイの女性が複数関わっていることから、廃絶運動を通じてマサイの女性の雇用が促進され、人材の育成が行われている点を指摘しておきたいと思います。廃絶運動のドナーである国際機関やケニア政府のレポートにおいてこの点はあまり注目されていません。先に述べたように、マサイの女性の社会的地位は決して高くなく、これまでは学校教育を受けたり、フォーマルセクターで就労したりできる女性は限られていました。しかしながら、FGM/C廃絶運動は女性の身体にかんするイシューであるため多くのマサイの女性が活動に取り込まれていきました。また、廃絶運動に関わる女性リーダーの中には、政府にリクルートされる人も現れ、各種のシンポジウムに招かれる人も増えています。こうしたマサイの女性スタッフたちの姿は、少女たちのロールモデルになることが考えられます。現状ではFGM/Cが地下化してい

るという問題はあるものの、廃絶運動を契機としたボトムアップの社会変化が少しずつ起きています。今後も長期的な調査によって廃絶運動がもたらした影響について記録を続けていきたいです。

【謝辞】
本報告にあたっては下記の助成を受けました。記してお礼申し上げます。
・竹村和子フェミニズム基金（2014年度）
・科研費特別研究員奨励費「ケニアのマサイ社会における成女儀礼の変容――暴力的慣習をめぐる女性たちの葛藤」（代表者：林愛美、2015-2017年度）［課題番号15J06996］
・科研費挑戦的研究（萌芽）「『女性性器切除』廃絶の学際的研究――『ゼロ・トレランス』から『順応的ガバナンス』へ」（代表者：宮脇幸生、2018-2021年度）［課題番号18K18541］

【参考文献】

中村香子 2021「第５章 ＜女子割礼/女性器切除＞をめぐる多様性と柔軟性のエスノグラフィー ――ケニア牧畜社会におけるFGM廃絶運動の功罪」宮脇幸生、戸田真紀子ほか編 2021 pp.97-120、晃洋書房。

林愛美 2021「第４章 草の根のFGM/C廃絶運動と地元住民 ――ケニア・マサイの事例から」宮脇幸生、戸田真紀子ほか編 2021 pp.73-96、晃洋書房。

宮地歌織 2021「第３章 変容する『女子割礼（FC）』――西ケニア・グシイにおける医療化と儀礼の変化」宮脇幸生、戸田真紀子ほか編 2021 pp.50-70、晃洋書房。

宮脇幸生、戸田真紀子ほか編 2021『グローバル・ディスコースと女性の身体 ――アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性』晃洋書房。

Bedri, N.M.A. 2007 “Volunteerism and Community Mobilization for the Abolition of FGM: Lesson Learnt from the UNV Pilot Project in Sudan,” Paper presented at *the Violence Against Women Conference*, Suzanne Mubarak Regional Centre for Women’s Health and Development 23-25 October, Alexandria, Egypt.

Dorkenoo, E. 1995 *Cutting the Rose: Female Genital Mutilation: The Practice and Its Prevention*, (pbk.) London: Minority Rights Publications.

Hayashi, M. 2017 “The State of Female Genital Mutilation among Kenyan Maasai: The View from a Community Based Organisation in Maa Pastoral Society”, *Senri Ethnological Reports*, 143: 95-117.

Mitzlaff, U. Von. 1988 *Maasai Women: Life in a Patriarchal Society, Field Research among the Parakuyo, Tanzania*, Tanzania Publishing House, translated from the German by C.

Groethuysen and T. Dibdin (1994).

Mohamud, A., S. Radeny and K. Ringheim 2006 "Community-Based Efforts to End Female Genital Mutilation in Kenya: Raising Awareness and Organizing Alternative Rites of Passage," in Abusharaf, R. M. ed. *Female Circumcision: Multicultural Perspectives* (Pennsylvania Studies in Human Rights) Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Shell-Duncan, B. 2008 "From Health to Human Rights: Female Genital Cutting and the Politics of Intervention," *American Anthropologist* 110(2): 225-236.

Spencer, P. 1993 "Becoming Maasai Being in Time," in T. Spear and R. Waller eds., *Being Maasai: Ethnicity and Identity in East Africa*, London: J. Currey.

Talle, A. 1988 *Women at a Loss: Changes in Maasai Pastoralism and their Effects on Gender Relations* (Stockholm Studies in Social Anthropology 19), Stockholm: University of Stockholm.

電子情報

林愛美 2020「マサイのローカルNGOによる代替儀礼の分析 ――『教義』の内容に着目して」*MWENGE* 45: 1-30。http://web.kyoto-inet.or.jp/people/keiko-ku/Africa/hayashi45.pdf（アクセス2021年10月16日）

Anti-FGM Board ウェブサイト. https://www.antifgmboard.go.ke/（アクセス2021年11月29日）

Equality Now 2011 *Protecting Girls from Undergoing FGM in Kenya and Tanzania: The Experience of Working with the Maasai Communities in Kenya and Tanzania*. https://d3n8a8pro7vhmx.cloudfront.net/equalitynow/pages/315/attachments/original/1527599796/Protecting_Girls_FGM_Kenya_Tanzania.pdf?1527599796（アクセス2021年12月17日）

Matanda, D., C. Okondo, C. W. Karibu and B. Shell-Duncan. 2018 *Tracing Change in Female Genital Mutilation/Cutting: Shifting Norms and Practices among Communities in Narok and Kisii Counties, Kenya*. https://knowledgecommons.popcouncil.org/cgi/viewcontent.cgi?article=1568&context=departments_sbsr-rh（アクセス2021年12月17日）

The National Council for Law Reporting. 2012a *Children Act, 2010 Revised Edition*. http://kenyalaw.org/kl/fileadmin/pdfdownloads/Acts/ChildrenAct_No8of2001.pdf（アクセス2021年10月16日）

――――― 2012b *The Prohibition of Female Genital Mutilation Act, 2011 Revised Edition*. http://kenyalaw.org/kl/fileadmin/pdfdownloads/Acts/ProhibitionofFemaleGenitalMutilationAct_No32of2011.pdf（アクセス2021年10月16日）

The National Council for Population and Development. (NCPD) 2015 *Kenya Demographic and Health Survey 2014*, https://dhsprogram.com/pubs/pdf/fr308/fr308.pdf（アクセス2021年10月16日）

UNICEF. 2013 *Female Genital Mutilation/Cutting: A Statistical Overview and Exploration of the Dynamics of Change*, https://data.unicef.org/resources/fgm-statistical-overview-and-dynamics-of-change/（アクセス2021年11月28日）

――――― 2020 *A Profile of Female Genital Mutilation in Kenya*, https://data.unicef.org/resources/a-profile-of-female-genital-mutilation-in-kenya/（アクセス2021年11月29日）

WHO. 2008 *Eliminating Female Genital Mutilation: An Interagency Statement OHCHR, UNAIDS, UNDP, UNECA, UNESCO, UNFPA, UNHCR, UNICEF, UNIFEM, WHO*. http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/43839/9789241596442_eng.pdf;jsessionid=75642490B9148C650945ACD3CA07C5A2?sequence=1（アクセス2021年10月16日）